慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『ハムレット』における「自然」：<覚書>
Sub Title	Nature in Hamlet
Author	安東, 伸介(Ando, Shinsuke)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1989
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.54, (1989. 3) ,p.427- 436
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	村松暎, 藤田祐賢両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00540001-0427

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ハムレット』における「自然」——〈覚書〉

安東伸介

シェイクスピアの作品に現れる‘nature’という語を、「自然」という唯一語の日本語に移すことは不可能である。別に‘nature’に限ったことではない。この種の厄介な問題が生ずるのは他の様々な語彙についても同じである。例えば、‘love’, ‘order’, ‘peace’, ‘law’, ‘custom’, ‘fortune’, ‘reason’, ‘time’, ‘form’, ‘fashion’といった語——これらはいずれも実は‘nature’に深く関わる語なのであるが——こうした複雑・多様な意味を持つ含みの多い言葉を唯一の適切な日本語に置き換えることは殆ど不可能である。

シェイクスピアの「自然」という語の、変幻自在なプロテウス的性格を一応見事に整理してみせた代表的な著書は、J・F・ダンビーの『シェイクスピアの自然観・「リア王」の研究』であろう(1)。ダンビーは中世的自然観とそれに対立する近代的自然観の、それぞれの特質を論じ、いわばこの二つの自然観の葛藤が『リア王』という作品の劇的な構造自体を決定する條件であったとしている。この『リア王』解釈は秀抜である。然しながら、無論シェイクスピアは、ダンビーの分析・弁別とは関わりなく、一貫して‘nature’という一語で押し通しているのである。『リア王』のテクストを読むわれわれの、‘nature’という語に対する連想が揺れ動くのは当然であろう。そればかりではない。「自然」という語を、ダンビーのように明確に、中世的概念と近代的概念に二分して考える方法が、果して完全に妥当であるか否か、

これは一考を要する問題であろう。ダンビーの分析が極めて見事なものであるが故に、われわれはともすればダンビーの言う「中世的自然」と「近代的自然」の両者に共通するいわば「自然」それ自体の像、歴史の重みのかかった「自然」という言葉自体の指し示すものを感得し損う。これは危険なことである。

聖ヨハネの福音書昌頭の「初めにコトバ（ロゴス）ありき」という文言を思えば、言語学は神学と同様、極めて危うい学問である。言葉を論ずることは、神を論ずることと同じように危険な業ではないのか。「神とは何か」と問われて人の心が動揺するように、唯一つの言葉の語義をめぐって、深く考えれば考えるほど、人は迷うのである。詩における言葉の問題とは、元来そのようなものであり、この迷いを意味論が完全に解決し得るとは考えられない。かつて西脇順三郎は、「詩を論ずるは神様を論ずるに等しく危険である。詩論はみんなドグマである。」と言った(2)。試みに「詩」を「言葉」に置きかえても不都合はない。詩学も言語学も神学同様、危険な学問である。神学の歴史はもとより、言語学も詩学も、その歴史は、ドグマの歴史である。

「自然」という語に関するダンビーの説も、今日では一つのドグマになったとさえ言えるのだが、私はここで、ドグマとしてではなく、ダンビーの方法的態度、（その背後にはノウルトン、ティリアド、スペンサーといった人たちの業績がある(3)――）を念頭において、『ハムレット』の「自然」について少し考えてみたいと思う。シェイクスピアの作品中、特に『リア王』に「自然」という語が頻出するのは事実であるが、『ハムレット』も決してそれに劣らない。ダンビーは『リア王』の劇的構成、更にまたその劇作品自体の意味を、「自然」という語を手掛かりにして解明しようとした。対蹠的な異質の概念を持つ二つの「自然」が対立し拮抗する、一種の観念劇として『リア王』を解釈しようとしたのである。シェイクスピアの演劇的教養の形成に「道徳劇」が大きな役割を果したとすれば、『リア王』はその事実を端的に示した、「自然」というアレゴリーの劇と見ることも可能であろう。これに比べれば、『ハムレット』の場合、「自然」という語は

劇的構造を左右するほどの決定的な役割を演ずるキー・ワードとは言えまい。然し、『ハムレット』に現れる'nature'という語もまた、中世と近代の過渡期、これをルネサンス期と稱するならば、そうした時代の、いわば中世と近代の微妙に複合した「自然」の概念を様々な形で示しているように思われて興味深い。その一端を詮索してみたいと思うのである。

先ず第三幕第二場の冒頭で、ハムレットが旅廻りの役者たちに向かって、シェイクスピア自身の演劇観を代弁して語ったものとも思われる有名な台詞の一節を引く(4)。(斜字体引用者)

Hamlet 〔*to the First Player*〕. Speak the speech I pray you as I pronounced it to you,trippingly on the tongue, but if you mouth it as many of your players do, I had as lief the town-crier spoke my lines. Nor do not saw the air too much with your hand thus, but use all gently, for in the very torrent, tempest, and as I may say whirlwind of your passion, you must acquire and beget a *temperance that may give it smoothness*.

(中略)

Hamlet. Be not too tame neither, but let your own *discretion* be your tutor, suit the action to the word, the word to the action, with this special observance, that you *o'erstep not the modesty of nature*: for *any thing so o'erdone* is from the purpose of playing, whose end both at the first, and now, was and is, *to hold as 'twere the mirror up nature* to show virtue her own feature, scorn her own image, and the very age and body of the time his form and pressure...

福田恆存氏の邦訳（新潮社版）を左に掲げる。（傍点引用者）

ハムレット　（第一の役者に）わかったな。今のせりふは教えたとおり、ごく自然の調子でさりげなく言うこと。お前たちの仲間がよくやるように、大口あけてわめきちらされるくらいなら、むしろ町のひろめ屋に頼むからな。もう一つ、こんなふうに、まるで泳ぐように手で空をかきまわさぬこと。つねに穏やかにやってもらいたい。感情が激してきて、いわば嵐の真っ只中に立ったときこそ、かえって抑制を旨とし、演技に然なすなおさ与えることが肝要だ。

（中略）

ハムレット　といって、あまりさらりと喋られても困る。その辺の呼吸はめいめい分別にしたがうよりほかはない。要するに、せりふにうごきを合わせ、うごきに即してせりふを言う、ただそれだけのことだが、そのさい心すべきは、自然の節度を越えぬということ。何事につけ、誇張は劇の本質に反するからな。もともと、いや、今日でも変りはないが、劇というものは、いわば、自然に向かって鏡をかかげ、善は善なるままに、悪は悪なるままに、その眞の姿を抉りだし、時代の様相を浮かびあがらせる……

ハムレットは大形な演戯を戒め、「自然」こそ演戯における理念の基本であるとする。演戯は無論「自然」そのものではない。演戯もまた「自然」のミメーシスである限り、'art' の世界に属する行為である。ところで、シェイクスピアは、「自然（ネイチャー）」と「技芸（アート）」の関連について明快な考えを持っていた。例えばそれは、『冬物語』の第四幕第四場（八十九―九十二行）でポリクシニーズがパーディタに語る言葉に、端的に現れているように思われる。

……Nature is made better by no mean
But Nature makes that mean:so over that art
Which you say adds to Nature, is an art
That Nature makes.

〈大意〉自然が何らかの手段によって改良されるとしても、その手段を作り出すのはやはり自然なのだ。だからあなたの言う、自然(ネイチャー)に手を加える技巧(アート)とやらも、自然(ネイチャー)自身の作り出す技巧(アート)が支配しているのだ。

演劇における‘art’は、「自然」自身から生まれる‘art’によって支配されるべきものである。演劇における「自然」の意義を、ハムレットが（そしてシェイクスピア自身が）、そのように把えていたと考えることに問題はあるまい。そうした文脈の中で、‘speak the speech...trippingly on the tongue’、という台詞を福田氏が邦訳する際、「ごく自然の調子で」という原文にはない言葉を補っているのは至当である。また‘smoothness’という一語を、「自然なすなおさ」と訳した点にも、訳者の周到な配慮が感じられる。

福田氏の訳文中、傍点をふった「分別」は、原文では‘discretion’、「自然の節度を越えぬということ」は‘o'erstep not the modesty of nature’、「誇張」は‘anything so o'erdone’となっている。「分別」‘discretion’も、「節度」‘modesty’も、元来、伝統的な中世の「自然(ネイチャー)」の概念に含まれるものであった。従ってこれを「越えること」、節度や分別をふみはずして「誇張」すること、すなわち黄金の中庸の規範を‘overstep’し、‘overdo’することは、中世的な自然観からすれ

ば、まさしく自然に反する悪しき行為なのであった。仮にチョーサーがこのような行為を評するとすれば、間違いなく‘against natu re’と言ったであろう(5)。ルネッサンス的中庸の精神の根底には、明らかに中世の自然理念が継承されている。

さて、演劇の目的は、いわば「自然」に向って鏡をかかげることだ、というこのあまりにも有名な台詞の「自然」とは何か。福田訳も、また私の知る限り、すべての邦訳は「自然」という日本語を用いている。これを誤訳というのは当たらない。然しながら、「自然」という日本語にこの場合の‘nature’の意味を託すのは少々無理ではあるまいか。この‘natu·re’とは、これまた中世的な自然概念に含まれる、月下の世界、永遠の世界に対する時間的な現世(6)、すなわち「人間の世界」というほどの意味である。「善は善なるまに、悪は悪なるままに、その眞の姿を抉りだし、時代の様相を浮かびあがらせる……」という台詞は、「人間の世界」を意味する抽象的な‘nature’という語の観念を、シェイクスピア自身が具体的に説明した注釈の如きものであったと私は考える(7)。

「時代の様相」の「時代」は‘the time’であるが、台詞の文脈において、この語は‘nature’の意味領域の中に含まれることになる。そう考えれば、ハムレットが第一幕の終りでつぶやく‘the time is out of joint’という大切な台詞は、中世的理念における自然の、すなわち法と秩序と道義そしてまた調和の理想の具現たるべきこの世のタガがはずれ、一切がカオスの状態に陥ったことを嘆いたものとして理解することが一層容易になるのではあるまいか。この台詞の意味の重さを感得することは、そのままハムレットの窮境を感得することだが、通常の「注釈」は殆ど役に立たぬ。ハムレットの倫理的・道徳的信條は、極めて中世的なものであったように私には思われる。オフィーリアはハムレットに人間の理想像を見ていた。その理想的人間とは、中世的な「自然」概念に含まれる、道徳的・倫理的規範の肉化した姿であったとも言い得よう。

Ophelia. O, What a noble mind is here o'erthrown !
The courtier's, soldier's scholar's, eye, tongue, sword,
The expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion, and the mould of form,
Th'observed of all observers, quite quite down,
And I of ladies most deject and wretched,
That sucked the honey of his music vows,
Now see *that noble and most sovereign reason*
Like sweet bells jangled, out of tune and harsh,
That unmatched form and feature of blown youth,
Blasted with ecstasy ! O, woe is me !
T'have seen what I have seen, see what I see !

（III, 153—164）

言うまでもなく右の引用（斜字体引用者）は、いわゆる〈尼寺の場〉でオフィーリアが、一国の精華としてあらゆる人々の讃美の的だったハムレットの、変り果てた姿を見て嘆く台詞である。その斜字体部分の福田訳を引く。（傍点引用者）

「気高く澄んだ理性の働きは、耳をくすぐる鐘の音、それも狂うて、いま、この耳に、ひびわれた音を聞かねばならぬ――。」

「理性」の喪失はすなわち「自然」の崩壊にほかならない。ここで、「理性」と「自然」の関わりについて、興味深い例を考えてみる。クローディアスは、亡き父を憶って鬱々としているハムレットに向い、その孝心を讃えながらも、いつまでも悲しみに閉じこもる態度を難じて言う。

……'tis a fault to heaven,
A fault against the dead, *a fault to nature,*
To reason most absurd,……

(I, 2, 101―103)

「愚かしいぞ。天に背き、死者に背き、自然に背く。いやなにより理性に背く罪というもの。」(福田訳、傍点引用者)

「理性」に背く罪('to reason most absurd')とは、「自然」に背く罪('a fault to nature')という言葉に関する、これまたシェイクスピア自身の注釈の如きものであったと私は思う。中世的自然観の見地からすれば、「理性」は当然「自然」の属性の一つであった(8)。「自然に背く」とは、すなわち「理性に背く」罪、思慮・分別・節度の規範に背く罪にほかならない。これまた「自然」という日本語では、なかなか原文の意味を伝えにくいように思う。ところで、そのクローディ

アスが劇中はじめて登場する台詞の中で、兄上ハムレットの死は痛恨に耐えぬが、それはそれとして我が身のことも思わねばならぬ、という意味のことを語り、「分別が自然（の情）とたたかって」そういう気持になったのだと言う。

Yet so hath *discretion* fought with *nature*,
That we with wisest sorrow think on him
Together with remembrance of ourselves:

(I, 2, 5—7)

この場合「分別」'discretion' と「自然」'nature' は、明らかに対立する概念として用いられている。この 'nature' は言うまでもなく、クローディアスがハムレットを戒める時に用いた 'nature' とは対蹠的な意味を持つ。またハムレットが旅廻りの役者たちに説いた、「分別」と「節度」と不即不離の「自然」の概念とも対立する。ダンビー的に言えば、クローディアスの「自然」には、中世と近代の自然観が混合しているのだということになるかも知れぬ。然し、こうした形の語義の分析も、節度を越えぬよう、ほどほどにしておくべきであろう。われわれは、シェイクスピアが 'nature' と言う唯一語にこめた深い意味の含みをそのまま感得すべきなのである。スタンダールは、小説とは町の大通にかかげた鏡の如きものであると考えていた。「さて、諸君、小説というものは大通に沿うてもち歩かれる鏡のようなものだ。諸君の眼に青空を反映することもあれば、また道の水溜りの泥濘を反映することもあろう。(9)」これは殆どハムレットの台詞の変奏である。シェイクスピア、とりわけ『ハムレット』という作品に深い関心を抱いていたスタンダールのこの小説観は、ハムレットの、演劇の目的は「自然」に向って鏡をかかげることだ、というあの台詞に由来するものではあるまいか。無論シェイクスピアの鏡(10)とスタンダールの鏡は大いに違っていたであろうが、スタンダールは『ハムレット』

における「自然」の意味を、近代人として極めて適確に直覚した大作家である。

註

(1) Jhon F. Danby, *Shakespeare's Doctrine of Nature: A Study of 'King Lear'* (London, 1949).

(2) 西脇順三郎『超現実主義詩論』(一九三〇年、厚生閣書店、一頁)。

(3) E.C.Knowlton, "Nature and Shakespeare," *PMLA*, LI, 719ff; E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (London, 1943); Theodore Spencer, *Shakespeare and the Nature of Man* (1949).

(4) シェイクスピアの原文引用は、すべてケンブリッジ版 The New Shakespeare のテクストに依る。

(5) 拙論「チョーサーに於けるNatureの問題」(『西脇順三郎先生記念論文集』(「藝文研究特集号」、昭和三十八年、八十九——一〇〇頁)

(6) Cf. "Thou Know'st 'tis common, all that lives must die,／Passing through nature to eternity." (Hamlet, I, 2. 71—72)

(7) ケンブリッジ版 *Hamlet* の編集者ドウヴァ・ウィルスンは、この 'nature' に関して、(not "reflect nature" but "show human nature the ideal") という注釈を考えているが、首肯しがたい。

(8) 前掲拙論参照。

(9) 『赤と黒』(桑原武夫・生島遼一訳、岩波文庫、下巻二一三頁)。

(10) 野島秀勝「ハムレットの鏡」(笹山隆編『ハムレット読本』、一九八八年、岩波書店、四—二十六頁) 参照。

〈後　記〉

拙論は、かつて『シェイクスピアリアーナ』(第三巻、一九八六年、丸善) に随筆として寄稿した小文に加筆訂正を加えたものである。